



# Giving Tree



MIMAMORU HOIKU

## 一斉指導

新宿せいが子ども園

園長 藤森 平司

私たちは、学校ではいわゆる一斉授業という形式で授業を受けてきました。一斉教授とは、一人の教師が多数の生徒を同じ時間内に教えていく教授の方式で、世界の多くの学校の大部分の教授はこのやり方で行われています。日本では、江戸時代までの寺子屋では、生徒個別に先生は教えていましたが、明治に入ってから公教育が整備され、義務教育化に伴って西洋の教育システムを導入することになり、一斉授業という形態になりました。

その利点として、クラスのすべての生徒に、一度に共通の内容を教えられる、異なった経験や情報をお互いに出し合えて、集団思考ができるという点が挙げられてきました。また共通の学力の形成にもつながると思われてきました。

その反面、詰め込み教育になりやすく、個人差に応じた指導ができにくく、取り残される子どもが多くなり、いわゆる日本としての言葉とされている「落ちこぼれ」という存在が生まれ、逆に、足止めされる子どももある、最近「浮きこぼれ」という言葉に代表される欠点も指摘され始めました。また、この一斉授業は、とかく先生の押し付けに走りがちになる、大人主導的な要素が強くなってしまおうという面も否定できません。

このような考え方を私は持っているのですが、『「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して』（奈須 正裕 著、編集）のなかで奈須氏は、一斉指導の最大のメリットを、「安上がり」だということだ。彼は、そもそも、学級やそれを基盤とした一斉指導は自然発生的に生まれたものではなく、明確な意図のもと、近代という時代に「発明」されたものであると言っています。彼も寺子屋のこのことを以前に「発明」されたものであると子どもが一つの部屋に居合わせても学習は個別的に進められ、教材も一人ひとり違っていた。ほとんどの時間、子どもたちは師匠がその子のために準備した教材を各自のペースで自習していて、それを一人ひとり順番に師匠が呼んで、少しの間、個別に指導するのが基本だったのである。

また、一斉指導の方が効率的かという点、そうでもないようです。家庭教師のようなマンツーマンでの指導は、その子のペース、知識や思考の状態、意欲や体調などに徹底して寄り添えるので、子どもから見た学びの効率はほぼ最大になり、無理なく着実に学びを保障できます。認知心理学の研究によると、マンツーマンでの指導では、教室の一斉指導の4倍の速さで同じ水準に達することが知られているそうです。

しかし、当然費用は掛かります。そこで採用されたのが、学級集団を相手にした一斉指導だということです。すなわち、安価に教育を行えるということを採用されたのです。奈須氏は、一斉指導は教育方法として優れているからではなく、もっぱら安上がりであるという理由により採用されたと言っています。

一斉指導という形態の中での協働的学びは、明治の終わりから大正にかけて、心ある教師の取り組みにより、多様な子どもたちが共に学び育つ場として学級は「発見」されるし、それが協働的な学びの頂点だと奈須氏はいうのですが、学級の「発明」とはまた別の物語になると言っています。たぶん、これが世界中で起こった、幼児教育をはじめとした教育を見直した「新教育運動」だったのでしょ

その一斉授業も次第に見直されてきています。必要に応じて、グループ学習や体験学習、個別学習と組み合わせる授業を工夫してきていますし、「一律一斉授業」を見直した、「自ら考え学ぶ力」の育み方「主体性が出ちゃう場」をつくるのが教員の仕事となる小学校も増えてきています。神奈川県逗子市立久木小学校教諭の大窪昌哉氏は、ある時を境に5年生の学級において、全教科で従来の一律一斉型の授業を見直しました。



それから卒業までの間に子どもたちは、しだいに自ら考えて行動するようになっていき、「すごいと思わされる場面がたくさんあった」といっています。大窪昌哉氏が授業スタイルをガラッと刷新したのは、コロナ禍の一斉休校がきっかけだったと言っています。「休校の間、プリント配布に終始してしまった学校は多く、持て余した時間に何をしたらよいかわからない子どもたちもたくさんいました。このとき、僕ら教員は結局、『自ら考え、自ら学ぶ力』を育てていなかったんだと、猛烈に反省しました」そんな大窪先生の授業改善の影響から「脱・一斉授業」の挑戦が、小中学校で広がっているところがあります。教室内の子どもたちの多様性が高まる中で、同じ内容や進度で全員に行う授業には限界を感じ、一人ひとりに適した学び方に転換しようという動きです。長野県木曾町立福島小学校は、2020年度から「単元内自由進度学習」を導入したそうです。一人ひとりが自分のペースで学べるよう、様々な教材を教員が準備。教材、進度、方法、場所などを単元の目標に沿って各自が選択し、計画を立てながら学ぶ。当初は国語や算数などを1教科ずつ行っていたのですが、昨年度は音楽や図工などの実技教科まで広げました。周囲の子の進度と比べないよう、高学年では指定した授業時間内で2教科や4教科を好きな形で学ぶことも試しました。全学年で年間授業時数の1割程度、採用しているそうです。小学校の改革は着々と進んでいるようです。

### GT information

#### 「STEM 研修会のお知らせ」

一社)乳幼児 STEM 保育研究会 主催の研修会が9月30日(月)に東京理科大学森戸記念館で開催します。今年の記念講演はEテレ「チコちゃんに叱られる」によく出演されている川村康文先生(乳幼児 STEM 保育研究会理事)に登壇していただき、講演をいただきます。これから STEM 保育を実践するにあたって、とても参考になる研修会となりますので、ぜひご参加ください。申込方法は当研究会HPをご確認ください。



ギビングツリー公式

「GTチャンネル」 「サブチャンネル」

毎月、収録とライブとの併用でアップしています！そして、少しずつ知名度が上がってきた「サブチャンネル」こちらもぜひチェックしてみてください。サブチャンネルの方は、とてもゆる～い感じになっていますし、現場の先生がメインとなっております！引き続き、よろしくお祈りします！！

「GTチャンネル」のサイトはこちらのQRコードから！！



# Giving Tree Report

全国のGT園の先生方に、  
実践を報告してもらおう場です！

## 感謝と願い

私が藤森先生にお会いしたのは、一般企業を退職し、実家のある三重県に戻って保育園に勤務を始めて間もない、平成28年の全私保連全国大会でした。藤森先生の分科会に参加し、講演を聴き、その内容には金属バットで頭を殴られるような衝撃があったことを今でもハッキリと覚えています。

私たちが生きてきた過去の時代とは違い、大きく変化していくこれからの社会を生きていく子どもたちにとって本当に必要な能力を育む保育に出会い、たくさんのことを学ばせていただいています。藤森先生の講演を聴く中で、脳科学的な視点や心理学に基づく理論、そしてこれらの根拠を展開しながら保育だけでなく、教育の分野においても活躍されている著名人との出会いも私にとっては大きな財産でもあり、学びの広がりを感じられます。人物で言えば、麴町中学校で校長をされ、教育改革をされた工藤勇一先生、令和3年に開催のGTサミットで講演をされた鈴木寛先生、またコロナ禍においては認知科学者の明和政子先生の名前もよく聞かれました。その他にもオランダのイェナプラン、また内閣府における総合科学技術・イノベーション会議（Society5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ）、それからお茶の水女子大学子ども園における異年齢児保育の話は記憶に新しい方も多いかと思えます。他にもたくさんあります。これらのことを更に調べ、学びを深めていくと、多くの点で「藤森メソッド」とリンクしていることが理解できます。そして、何よりもこれからの教育改革が成功に終わるためには、そのベースになる乳幼児教育に「藤森メソッド」が欠かすことのできない保育であることに気が付かされます。

私たち保育の現場に携わる者、特にGT園の保育者たちはこういった知識に出会うことができ、そして「藤森メソッド」を実践していくことができることは、本当に幸せなことだと感じます。そして感謝の気持ちを込めて、これからの社会を強く生き抜くために子どもたちに育って欲しいと願う資質・能力は、まず私たち大人が実践し、子どもたちにとってのロールモデルにならなくてはいけないと強く思います。

今年度6月に、ながさわ保育園では、藤森先生をお招きして「保護者向けの講演会」を開催しました。多くの保護者にご参加いただき、たくさんのお褒めをいただきました。参加された保護者の中には「感動して涙が出た」との嬉しいお言葉もいただきました。これからは私たち保育に携わる者が学びに出会い、感動し、「藤森メソッド」を実践していく喜びを、今度は是非子どもを持つ全てのおとなにも味わって欲しいと思います。そしていつの日か全国の子どもを持つ大人が「藤森メソッド」を広く認識し、保育施設に求めるものになることを、子どもたちの明るい未来のためにも心より願います。

三重県 ながさわ保育園  
園長 中瀬弦偉



## 「見守る保育」との出会い

富山県富山市にあるながさわ保育園は、2005年に公立から移管され開園し、19年目となります。開園後数年は、公立から引継ぎした縦割り保育を行っていました。自分の部屋で遊び、年齢別活動になると遊んでいたものを片付けて、年齢別の部屋にいくという流れでした。職員主導の一斉活動が多く、子どもたちからの遊びの展開や発信の保障に欠け、このままでもいいのだろうかという疑問を抱くようになり、悩んでいた時に「見守る保育」を知り、新宿せいが保育園に園長・主任・同僚と私も一緒に見学に行かせていただいた時が初めて藤森先生との出会いでした。新宿せいが子ども園の環境・先生方の関わり方を見せていただいたり、藤森先生のお話を聞かせていただいたりしたことにより、自分たちのやりたい保育が見え、これからの保育について話が尽きなかったことは今でも忘れていません。早速帰園後、「とりあえずやってみよう」「真似してみよう」という思いで、縦割り部屋の遊具をすべて入れ替え、部屋ごとにゾーンを作りました。やはり子どもたちの環境に対する柔軟性は大きく、子どもたちの姿に変化が見られ、やがて良くなったと思った瞬間でした。見学に行かせていただいた職員のみがいきなり行った保育環境の改革に他の職員は困惑！

そこで、藤森先生を園にお招きして講演会をしていただき、「見守る保育」について保護者の理解と職員の学びの場としました。職員の立ち位置や子どもへの声をかけるタイミング・見守るところなど職員全員が共通理解することにより、一層保育環境を充実させたい気持ちが高まりました。

園庭改革では、築山・芝生はり、植樹など保護者と一緒に行うことにより理解も増えました。子どもが自らやってみよう！と思えるような物の置き場所や道具を用意することにより、様々なものを組み合わせ、発見し遊びこむことができるようになりました。「物の配置一つ一つにはねらいがある」まさにその通りと実感しました。また、今まで木登りをしている子には職員が付きっきりになっていたのですが、一人ひとりの発達を理解し、その子に合った距離感での接し方ができるようになりました。

しかし、藤森先生との出会いから10年ちよつと、コロナ禍があり、保育環境の改革が崩れていき、まだコロナ前の保育に戻れてない環境がたくさんあります。戻らなくてもいい、今の状況に合わせた考え方の保育ができればいいと環境の見直しをしています。ですがまだまだ課題だらけです。

今は、同法人西田地方保育園との合同研修会も年に数回行っています。環境や職員の子どもの関わり等を見て、お互いの保育を高め合っています。また、環境セミナーやGTセミナーなどにも参加させていたいただき、より一層「見守る保育」を理解していけるようにこれからも職員一同努力していきたいと思っています。

富山県 幼保連携型認定こども園  
ながさわ保育園  
園長 黒田香



## 【編集後記】

東日本大震災では、誰かの指示を待ってから行動するのではなく、状況を判断し、自ら行動することの大切さを学びました。そしてコロナ禍の一斉休校によって、子どもが自ら考え、学ぶ力がないということに気づいたと書いてありますが、人類に危機を及ぼす自然災害等は、私たちに警告を発しているようです。

人類が生存戦略として、社会を形成し、集団で生活するようになったことも同様な理由からと考えられます。

今日も子どもたちは、お友だちとトラブルが起こしてケンカをしたり、給食で配膳してもらったご飯をこぼしてしまったり、散歩で転んで擦り傷をつくってしまったり、たくさんの失敗を重ねて次は失敗しないように学んでいき、成長していきます。そう思うと、彼らの失敗は失敗ではなく、挑戦と捉えることができますね。もしも私たちが失敗をさせないよう、大人が先回っていることが家庭でも多いような気がします。子どもたちが安心して挑戦できる、そんな環境、雰囲気を作ることができていくといいですね。  
(新宿せいが子ども園 山下祐)

